

氏 名（本籍）	う つ ぎ 宇都木	あきら 昭（東 京 都）
学 位 の 種 類	博 士（言 語 学）	
学 位 記 番 号	博 甲 第 3866 号	
学位授与年月日	平成 17 年 12 月 31 日	
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当	
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科	
学 位 論 文 題 目	朝鮮語ソウル方言におけるアクセント句 －音響分析による再検討－	
主 査	筑波大学教授	博士（学術）
副 査	筑波大学助教授	Ph.D.（言語学）
副 査	筑波大学講師	博士（文学）
副 査	筑波大学教授	博士（文学）
副 査	東京外国語大学大学院教授	
	城 生 伯太郎	
	池 田 潤	
	白 山 利 信	
	湯 沢 質 幸	
	野 間 秀 樹	

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、ソウル方言を具体的な資料として、語よりも大きなレベルに対応するプロソディー単位である「韻律句」のサブカテゴリーの一つに位置づけられる「アクセント句」に焦点を絞り、これをいかに設定すべきであるか、またこれがいかなる特徴を有するものであるのかを検討した研究で、国際的に著名な Jun (1993) のモデルを叩き台とし、これに代わる修正案を、実験音声学的研究方法を採用することによって提出したものである。

本論文の構成は、以下のとおりである。

第 1 章 序論

第 2 章 アクセント句の音声的特徴

第 3 章 アクセント句形成とピッチ形状 (1)

－フォーカス課題による検討－

第 4 章 アクセント句形成とピッチ形状 (2)

－統語的曖昧文による検討－

第 5 章 モデルの再考

第 6 章 結論

第 1 章は、序論にあてられており、斯学の背景および先行研究概観が述べられている。

第 2 章では、音響音声学的方法を用いて、アクセント句における Fo（基本周波数）はもとより、それ以外の特徴であるインテンシティー、持続時間長、母音部フォルマントなどを対象とする解析を行なった。その結果、Fo だけでなくその他の音響音声学的諸特徴もすべてアクセント句と相関を有することが確認された。

第 3 章では、多様な解析資料を用いてフォーカス課題の実験を行なった。その結果、先行研究におけるこ

れまでの多くの知見に反し、フォーカスは必ずしもディフレージング（複数の文節をひとつのアクセント句に統合すること。例えば「**ボクノ**＋**ウチガ**」→「**ボクンチガ**」のような現象をさす）を引き起こさないことを指摘し、あわせてそのような場合に半独立型連結の一種である「ピークの抑制」と「ピークの完全な抑制」とが観察されることを見いだした。

第4章では、統語的曖昧文を課題とする実験を行なった。その結果、前章と同様先行研究におけるこれまでの多くの知見に反し、統語的曖昧文であっても必ずしもディフレージングは生じないことを指摘した。また、ここでも半独立型連結が見られたが、フォーカス課題の場合とは異なり、アクセント句頭のボトムが第1音節ではなく第2音節に現れるところから、これを「第2音節ボトム」と呼んで注目した。

第5章は、本論の中核をなす部分であり、第2章から第4章までに明らかにしたことを手がかりとして、著者の考えを以下の3点にまとめて示している。

- ①従来、ディフレージングとして一括されてきた現象の中には、「半独立型連結」として解釈すべき現象が混在していた。この結果、ソウル方言のピッチパターンをあらたに、(a) ピークの抑制、(b) ピークの完全な抑制、(c) 第2音節ボトム、の3種類によって捉え直すことができる。
- ②ただし、前部要素が1音節から成る場合のみ、従来説のとおり明らかなディフレージングが確認される。
- ③結論として、ソウル方言にはディフレージングと半独立型連結とが共存しており、音節数というパラメーターにより両者が中和するものとする。すなわち、Jun などによって主張されてきた従来のアクセント句そのものの有効性は認めつつも、その解釈の仕方に関して、これまでよりも小さい単位として捉え直すことを提案したことになる。

第6章では、各章で論じたことの総括を行なうとともに、今後の課題が示されている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

朝鮮語学におけるプロソディーの領域に関する研究は、今日では多くの方言で非示差的である単語レベルのアクセントよりも、より大きなレベルであるイントネーションの方へとシフトしている。本稿で扱っている「アクセント句」も、そのような学問的動向に沿ったテーマであり、最近の理論と実験とをうまく融合させている点に特色がある。

著者の扱ったテーマは、複数の文節をひとつのアクセント句に統合するディフレージング現象という微妙なピッチ変動を対象とするものだが、先行研究に対し、以下の4点において優れた業績を挙げている。

- ①現象そのものについて、Fo（基本周波数）はもとより、それ以外の音響的特徴であるインテンシティー、持続時間長、母音部フォルマントなどを綿密に検討した結果、従来多くの研究者が看過していたFo以外の音響音声学的諸特徴も、すべてアクセント句と相関性を有することを確認した。
- ②フォーカス課題の実験を行なった結果、先行研究における多くの知見に反し、フォーカスは必ずしもディフレージングを引き起こさないことを指摘し、あわせてその際に「ピークの抑制」と「ピークの完全な抑制」と命名された2種の半独立型連結が生じることを見いだした。
- ③統語的曖昧文を課題とする実験を行なった結果、②と同様先行研究における反例を確認し、アクセント句の第2音節にボトムが出現する「第2音節ボトム」の存在を指摘した。
- ④従来、ディフレージングとして一括されてきた現象に対し、あらたにこれを(a) 本来のディフレージング、(b) 半独立型連結、に2分することによってソウル方言ではこれらが共存しており、特定条件下でそれが中和されるという考え方を示して、基本的に従来の学説の枠組みは認めつつも、その解釈論において独自の見解を示し、斯学のプロソディー研究の進展に貢献した。

なお、今後の課題としては、扱っている現象がきわめて微細な周波数値に依存した音響音声学的方法のみ

を拠所としている点である。言語音は、究極的には大脳における聴覚情報処理によって意味理解が達成されることを目的とするものである以上、伝統的な音響音声学的方法のみによる宿命としての限界は否めない。また、この種の一般化を目指した研究にしては扱ったデータ件数が少ない点も若干気がかりなところではある。しかし、これらは本論文の成果を踏まえて研究を推進することによって将来解決されるはずの問題であり、学位論文としての価値をおとしめるものではない。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。